

# 弥生 vol.15



平成31年1月発行 弥生神社



# 「神宮大麻」の歴史



「神宮大麻」は、天照大御神（あまてらすおおみかみ）の「みしるし」として、伊勢の神宮で奉製され、年ごとに全国の神社を通して頒布されるお神札です。



神宮大麻

## 「御祓い大麻」と御師おんし

神宮大麻がいつ頃から全国各地でおまつりされていたのか定かではありませんが、平安時代末には、神宮に仕える御師たちが各地で「御祓おほらい」や「御祓い大麻」とよばれるお神札を頒布はんぷしていたことがわかっていきます。このお神札が、神宮大麻のはじまりとされています。

御師は全国各地へ赴いて神宮の崇敬を広めるとともに、檀那だんなや檀家と呼ばれた人たちの願いに応じてお祓いと祈禱きとうを行い、祈禱をした「しるし」として「御祓」を配っていました。人々はそれを「御祓さん」と呼び大切におまつりしながら、遠方から「お伊勢さま」を拜んで信仰を深めていました。

こうした御師の活躍により、江戸時代中期には全国の多くの世帯に大麻が頒布されていました。記録によれば、全国世帯数の約九割が大麻を受けていたといえます。

この頃になると各地に「伊勢講」と呼ばれる崇敬組織もつくられ、庶民の間でお伊勢参りが盛んになります。御師は、全国からやってくる参宮者の交通や宿泊の手配をも引き受けていました。ときには自邸も提供し、神楽や食事をふるまうなどのもてなしをしていたのです。

## 「一万度祓」・「五千度祓」

御師が頒布していた「御祓」には、剣先の形をした「剣御祓」や箱型の「箱祓」がありました。箱祓の包み紙にはお祓いを受けた回数と、「く大く夫ふ」、「く神官」といった御師の名前が記されていました。何度もお祓いをすると清めの力が増すと考えられており、「一万度祓」、「五千度祓」といった御祓大麻が頒布されるようになりました。こうした話が伝わり、神宮大麻は祓いのための祓具とも考えられています。

### 【参考】

國學院大學日本文化研究所編『神道事典』（弘文堂）

平成十一年

神社本庁『神宮大麻・曆についてのQ&A』

平成十年



「御祓」

神社本庁『神宮大麻・曆についてのQ&A』より

十一月 七五三詣



お宮の風景



十二月 注連縄奉製の集いとおでんの会





# 講座とワークショップ



平成 30 年秋から冬の記録です。

『大祓詞』書写会は毎月行っています。

9月 8日 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」  
第1章「肉体と魂—自己の保存と再生—」

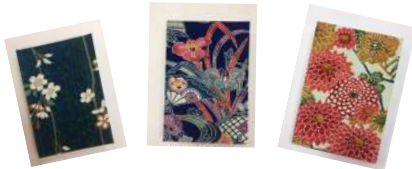
16日 「勾玉のおはなしと勾玉守り作り」



10月 6日 「重陽の節句～茱萸囊作りと菊花アレンジしゅゆのう」

11月 18日 【宗教・文化講座】「古代エジプト人の精神世界」  
第2章「炎の門と真実の羽—来世の世界—」

23日 「秋の御朱印帳づくり」



12月 2日 「しめなわ奉製の集いとおでんの会」

9日 「ドライユーカリの壁掛けと三種の焼き菓子の会」



16日 【宗教・文化講座】「生と死をめぐって—民俗・考古編1—」  
「葬送の多様性～中世日本人の墓と死生観（2）～」

22・23日 「歳神様と縁起物～熊手を飾ろう～」



# 柿の焼き菓子

少し季節は外れますが、ワークシヨップでお出ししたお菓子のなかでご質問の多かった柿の焼き菓子のレシピをご紹介します。



「ドライユーカリの壁掛けと  
三種の焼き菓子の会」にて



白あん粉末は白いんげん豆を粉にしたものです。デパートや和菓子材料売場に取り扱いがあります。

通常はこれに水と砂糖を混ぜ白あんにしますが、生地に加えて焼き込むことでほろりとした食感と、豆の素朴な風味が加わります。

## 柿の焼き菓子

20×13×2cm 1個分

|       |      |
|-------|------|
| 柿     | 中 1個 |
| 無塩バター | 100g |
| 砂糖    | 70g  |
| 全卵    | 60g  |
| 薄力粉   | 130g |
| 白あん粉末 | 20g  |

### ※シロップ用

|       |      |
|-------|------|
| 水     | 60g  |
| 砂糖    | 30g  |
| カルダモン | 3～4粒 |
| クローブ  | 4～5粒 |
| 蜂蜜    | 大さじ1 |
| レモン汁  | 小さじ2 |

### 下準備・1

柿の下ごしらえをします。

柿はなるべく熟した物を選んだほうが良いでしょう。皮をむき、スライスして、バットなどに広げて冷凍します。

ひと手間ですが、水分が適度に抜け、風味が凝縮されます。

熟れた柿が余っている際は上記のように冷凍しておけば、好きな時に解凍し、ヨーグルトやアイスに添えて楽しむこともできます。

焼成前日に柿を冷凍庫から出し、室温で解凍しておきます。(解凍の際に出る果汁はシロップに使います。ざるにあけて取っておきましょう。)



### 下準備・2

バター・卵を室温に戻しておきます。

型にオーブンシートを敷きます。

オーブンを180度に予熱します。

## 作り方



1. バターが指で押して柔らかくへこむ程度の固さになったら、泡立て器でクリーム状に攪拌します。砂糖を加え、さらに白っぽくなるまですり混ぜます。
2. 卵の半量を加えます。バターと分離しやすくなるため、分量の粉のうち20g程度を振り入れ、均一になるまで攪拌します。残りの卵を加え、空気を含み、やや白みを帯びるまですり混ぜます。
3. 残りの粉類をふるい入れます。ゴムべらに持ち替え、底からすくうように混ぜます。粉気が消え生地がツヤが出たら、柿の半量を加え、さつくりと混ぜます。
4. 型に生地を入れ、平らにします。(生地はソフトクッキーに近い硬さです。ラップやビニール袋などをかぶせ、上から押し込むようにするとやりやすいかと思えます)表面に残りの柿を散らします。オーブンで180度45分焼きます。
5. 焼き上がる前に仕上げ用のシロップを作ります。スパイスを砕き(私は乳鉢を使用していますが、なければ瓶の底などで叩くか、パウダーで代用しても良いでしょう)、小鍋で水、砂糖と共に沸かします。砂糖が溶けたら蜂蜜を加え、柿の果汁が入ったボウルに茶漉し等で漉し入れ、レモン汁を混ぜておきます。
6. 焼き上がった生地が熱いうちに、刷毛でたっぷりシロップを打ちます。冷めたら型から外し、ラップに包んで冷蔵庫で保管します。当日でもいただけますが、三日ほど経った方が生地が馴染んで美味しくなるようです。

柿の風味は穏やかです。聞かずに食べて柿だと言いついてられる方は多くはないですが、素朴な風味の中に涼やさもあり、秋らしいお菓子と言えるかもしれません。

余談ではありますが、柿を輪切りにしたことはあるでしょうか。私は硬めの柿をいただいたとき、種の周りにぐるりと包丁を入れ、ひねって半身から種を取り外します。(アボカドの実を割ると同じ要領です。)

放射状に種子や繊維が並ぶ柿の断面は、他の植物と同じように、時折花や星の面影を持っています。  
(権禰宜 池田沙)



カイク

# 蚕の神様を訪ねて

谷口悌三

(映像作家／民俗研究者)

## (三) 養蚕と縁起物

〜繭玉飾りとダルマ人形〜

### 繭玉飾り

弥生神社の蚕影神社は、大正七年に境内に遷座されました。それ以前は、地域の養蚕農家の守護神として祀られ、毎年正月十四日(小正月)には、木の枝にさした繭玉団子が何組もさげられていたそうです。

この「繭玉飾り」は、繭型に作った団子を木の枝につけて豊繭を祈る予祝行事で、「繭玉」(めーだま)とも呼ばれます。



羽村市郷土博物館での  
体験学習会

今では見かけることもなくなりましたが、東京の多摩地域の郷土館では、実際に楽しみながらつくってみようという体験イベントが行われています。

「繭玉団子」は、米粉をこねて丸めたり繭の形にして、蒸せばできあがり。飾る木は、つげや梅など地域によって様々ですが、身近にあるものを使います。繭玉団子の他にミカンを刺して飾る所もありますが、かつては黄色い繭が多かったという名残なのかもしれません。また飾った後は、お雑煮にしたり、あらにして食べるという話も聞きます。繭は汚れると出荷できなかつたため、「食べる時は醤油はつけない」と縁起を担ぐ農家さんもいたようです。羽村市では、繭玉飾りにダルマと御膳を供えます。養蚕農家では、ダルマ人形も「養蚕が当たりますように」という縁起物なのです。

### ダルマ人形

ダルマ人形は、天明の飢饉(一七八二〜一七八八年)の後、達磨寺(高崎市)の和尚が農民救済のため副業で張子ダルマを作らせたところ評判となったことが始まりとされます。ダルマが赤く塗られたのは、当時流行し





深大寺ダルマ市



松本ダルマの木型



大磯・左義長



ていた病氣（天然痘）を防ぐご利益を期待していたことでした。その形も養蚕の発展とともに現在のような鬮型に変化していきました。

安政六年（一八五九）、横浜が開港し、海外へ生糸・絹織物輸出が始まると、関東をはじめ全国に養蚕地帯が拡大し、養蚕農家が増大していくなかで、「蚕大当たり」を祈願する高崎だるまが人気を集めていきました。赤いダルマは、蚕の病気除けも助けてくれる養蚕農家の守り神とされたのです。

ダルマ人形は、木型に和紙を張り、それをセミが脱皮するようにペリッと剥ぎ取って、絵付けをしたものです。張子は中空なので、その中に様々な厄を吸い取ってくれるという縁起物です。そして祈願が叶ったら、両目を入れて厄を封じ込めて、お焚き上げで供養します。

小正月の「どんと焼き」では、正月のお飾りやダルマ人形などを積んで焼きます。また、その火で餅や団子を焼いて食べ、一年間の無病息災を願う伝統行事です。そこには養蚕という農業を営みながら、自然とともに日々の暮らしを豊かに彩っていききたいという人々の願いが込められてきたのです。

（文・写真／たにぐち・ていぞう）



一に云はく、二神 遂に邪神及草木石の類を誅ひて、皆己に平了りぬ。其の服はざる者、唯 星の神香々背男耳。

故れまた倭文神建葉槌命を遣せば、則ち服ひぬ。故れ二神天に登る。倭文神、此をば斯圖梨俄未と云ふ。

#### 『日本書紀』「神代下第九段」

葦原中国と星の神、葦原中国の平定、いわゆる「国譲り」の場面。記紀で語られる「国譲り」は、国津神である大国主命が天津神の子孫に日本の国土を譲り渡したという記事である。国津神は天孫降臨以前からこの国土を治めていたとされる土着の神であり、天つ神は高天原の神をいう。そして「葦原中国」は高天原を上、黄泉の国を下とした世界観に基づき、その中間にある現実の世界（国）を指す。古代には湿地帯に多くの葦が繁生しており、「豊葦原瑞穗国」といわれるように、「葦原」の中国は稲作に適した環境をもつと考えられていた。

本文では、二神、経津主神・武甕槌命が「悪しき」神たちをはじめ草木や石までをも平定したが、星の神の香香背男だけは服従しなかった。そこで建葉槌命を遣わし懐柔したとある。

葦原中国にいた星の神、香香背男。天津甕星といわれ、平田胤は『古史伝』においてその名より金星にあたと記している。ちなみに『古事記』には、日の神である天照大神と夜を統べる月の神、月読命は登場するものの星の神の記述はない。『日本書紀』にわずかに名を残す香香背男は、現在も全国の多くの星宮神社、星神社で祀られている。

# 天啓

森 岳人

(書籍編集者)



以前、日本のすばる望遠鏡も設置されているハワイ島マウナ・ケア山頂付近(標高四二〇五メートル)まで行く星空鑑賞ツアーに参加したことがある。案内人は、レーザー光線で様々な星や星座を指し示しながら解説してくれた。夜空は、さすがに世界中の観測所が集まっているところだけに、肉眼ではつきりと見える無数の星で覆われていた。

しかしヒマラヤではそんなレベルの星空ではないようだ。二〇一二年に八〇〇メートル・峰十四座登頂を成し遂げた竹内洋岳氏によると「八〇〇メートルの高所では星の間に黒い空が隙間のように見える。点が光っているのではなく、空が面で発光しているような印象です」「星の数が多すぎて、星座がわかりません」だそうだ。

そんな夜空を見て、「星空は美しい——誰もがそう思うだろう。しかし、マウナ・ケアで見た星空でも、少し怖かったという思いもある。捉えきれないほど無数のものが全天にあり、言い様のない不安に襲われる。無数の目で見られているようにでもあり、心穏やかになれない。

さらにずっと見上げていると平衡感覚が失われ、星で埋め尽くされた底なしの世界にわが身が

投げ出されていくような気がしてくる。宇宙の広さと深さ、そして「一体感」を感じた瞬間だ。

竹内氏によると、ヒマラヤでは天の川まできれいに見えるらしい。肉眼で間近に宇宙を見ているという感覚なのではないだろうか。

明かりが発明される以前、大気が汚染される以前の夜は、おそらく漆黒の闇だった。しかし空を見上げれば、無数の光の粒が空を覆っていたはずだ。古代の人々はそこに星座を見出し、また様々な運命を占った。近代科学が明らかにする以前から、地球も宇宙の一部であり、人間もその産物なのだと感じていたのかもしれない。

そんな星空を普段見ることができなくなった現代でも、星占いビジネスは繁盛し、宇宙と通信できるといふ輩が信者を集めている。だが、すごい星空はそんなに観念的で都合の良いものではなく、もっと各々の身体に迫ってくるものだ。私が感じた「怖さ」は、宇宙の無限性に慄いた結果である。迷いなく生きる力が欲しいなら、恐れを感じるほどの星空を見れば十分だ。本当に美しいものには、畏怖を感じさせるほどの力が備わっている。そんなことを満点の星空は教えてくれたような気がする。

(文／もり・たけこ)



ヌウト女神の体内を通る太陽と星々

# 天空の航海者

Navigators of Heavens

和田浩一郎 (エジプト学研究者)

カイロは東京と遜色ない大都会で、しかもエジプト人は宵っ張りだから、街の灯りはいつまでも煌々として、赤黒い空で星はまったく面目を失っている。しかしひとたび都会を離れば、エジプトでは今でもなかなか見事な星空を拝むことができる。この国の農村部に行く楽しみのひとつである。

何しろエジプトは滅多に雨が降らない土地である。古代の人々が毎晩のように満天の星空を見上げ、そこからさまざまな着想を得たことに何の不思議もない。古代エジプト人は三六五日を一年とする暦を採用していた人々だったが、これはナイル川の増水の到来を告げる、シリウス星の出現周期を観測したことで得られた成果だった。さらに彼らは、シリウスを筆頭に、およそ十日間隔で夜明けの直前に昇る星々があることを見出した。こうした星々はデカンと呼ばれ、一年で三十六個が観測された。デカンの数をもとに十日を一週とする三十六週の暦が作られた。この三六〇日に含まれない五日間は、オシリス神話に登場する神々（オシリス・ホルス・イシス・セト・ネフティス）の誕生日とされ、通常の暦の外にある祝日として年末に付け加えられた。

古代エジプト人は星をふた通りの見方で認識していたことが知られている。ひとつは天に開いた穴から太陽の光が漏れているのが星であるという考え、もうひとつは星はそれぞれ独立した存在で、太陽と同じように空を旅しているという考えである。前者の考えでは、天はなめらかな金属でできていると考えられた。この天はときおり一部が欠けて穴が開くことがあった。夜になると太陽は天の裏側を通るが、その際に開いた穴から光が漏れたのである。ちなみに天の欠片は地上に落ちてきた。これはエジプトでもメソポタミアでも「天の金属」と呼ばれ、神々の世界からやってきた神秘的な物質として、祭具などを作るための素材として珍重された。その正体は隕鉄である。

もうひとつの考えでは天は世界を取り巻く水面であり、星々は舟に乗ってその表面を旅する航海者だった。天は女神ヌウトと見なされ、古代エジプト人は実際の夜空に女神の姿が大きく広がっているさまを想像した。ふたご座の星の集まりが女神の頭、はくちよう座の十字が女神の下腹とされ、ふたつの星座の



古代エジプトの星座

間に広がる天の川が女神の胴体と考えられた。星々は太陽とともに毎日、女神によって飲み込まれ、その体内を通じて再び生み出されるのであった。天の川は飲み込まれた星々の姿というわけである。



三十六の星々（デカン）

【表紙写真】王墓の天井に描かれた星空

ソティス女神として擬人化されたシリウス星を除けば、特定の星が古代エジプト人の崇拜の対象になることはなかった。それでも規則正しく活動するその姿は、創造神が作り出した秩序だった世界が、たしかに存在していることを人々に実感させるといって、大切な役割を果たしたのである。

（文・写真／わだこーいちろう）

【参考文献】

和田浩一郎『古代エジプトの埋葬習慣』（2014）株式会社ポプラ社

# 本を読む。 小河洋友

(おがわ・ひろとも／図書館司書)

星と人間との関わりを念頭に五冊を選んでみました。宇宙から届く星の光が、数多の天才を生みだし、人類の思考の様相を一変させていると思うと空恐ろしくもあります。星の光は我々をどこへ導くのか？興味はつきません。

星降る絶景——一度は見てみたい、至極の星景色

沼澤茂美／著

誠文堂新光社(2015.4)

人間を魅了してやまない星空の美しさ。本書は世界各国で撮影された星空とそして天体ショーの写真集です。ページをめくる度にその非日常の美しさに魅了されること間違いありません。日本ではお目にかかれない息を呑むような光景に出会うことができます。巻末には各作品の撮影データも掲載。



人はなぜ、夜空を見上げるのか——宇宙物理学の変遷と天才たち——

桜井邦朋／著

PHP研究所(2003.1)

古代から現代まで、人間の描く宇宙像がどのように変わり、また、それによって人生観がどう変化を遂げたのかを詳しく解説。我々が今ここにいる意味を宇宙が教えてくれる！ ニュートン、アインシュタインら宇宙の探求に人生をかけた物理学の天才たちの活躍を追う科学読み物です。



占星術の文化誌

鏡リュウジ／著

原書房(2017.3)

文学、美術、音楽、心理学、医療からマスメディアの「星占い」まで：占星術という思考法は、かけがえのない人生を星の動きと結びつけ、そこに意味を紡ぎ出すものであるとのこと。人間の根本的な心の動きから占星術が生み出され、共鳴しているからではないかと著者は考えます。



星の文学館

和田博文／編

筑摩書房(2018.7)

物理学者や哲学者だけでなく、星のきらめきは文学者も触発してきました。収録されているのは稲垣足穂「星を造る人」、三浦しをん「冬の一等星」、寺山修司「コメット・イケヤ」、川端康成「天の河」、金子光晴「箒星」などなど・・・錚々たる面子で送る35編の文学アンソロジーです。



星の文化史事典

出雲晶子／著・編

白水社(2012.3)

信仰、民俗、伝承、神話、芸術(文学、美術、建築)などなど：私たち人類が世界のさまざまな地域や時代において生み出した星に関係する文化をまとめたはじめての事典です。図版多数掲載、大量の項目は五十音順で収録しています。





## 「おおいぬ座」

## 星を見ること

カイズケン（画家）

東京の近郊で育った自分にとって、「満天の星空」というのはほとんど絵本の中だけの世界の世界のようでした。そんな環境でも、空気が比較的澄んでいる冬の夜空に輝くオリオン座はその特徴的な形で、その下に輝くおおいぬ座の一等星、シリウスはその明るさで、親しみ深い存在でした。

その星の光が、何年、何百、何万年もの時間をかけて地球に届くことを知ったのは、いつの頃だったでしょうか。今、見えている星の光が、自分の生まれる前や、さらには人間がこの地球に存在するよりも前に、その星を旅立ったものかも知れないということ。それは、途方も無い宇宙の広さを伝えてくれるのと同時に、ものが目に見えている、ということの不思議さを教えてくれます。

私たちは、ふだん自分の目の前で見えているものを、自分と同じ時間、同じ空間に存在しているものにとらえて暮らしていると思いますが、実際には、その物との距離が遠い程、その物からの光はほんのちよつとだけ遅れて目に届いてことになります。今、夜空に光って「見えている」星が、もしかしたら、今この瞬間には、もうそこにはないかも知れないということ、そしてそれは確かめようもないということ。それは、私たちが「今、生きている」と感じているこの世界も、夜空に見えている星座のように、世界のある断片の、見かけの上の姿でしかないのではないか、と思わせてくれるような気がします。

（文・画／カイズケン）

## 植物紀行（五）

### ドウダンツツジ

（満天星・灯台躑躅）

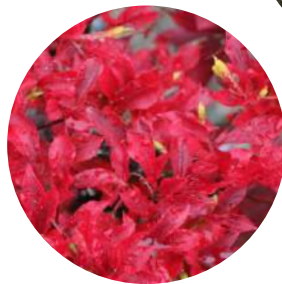
荒谷 渚

ドウダンツツジは、その名の通り、ツツジの仲間の落葉低木です。暖地では庭や街中の植え込みなどによく植えられる木で、名前は知らずとも見たことのあるという方も多いかと思いますが、そんな身近な木であるドウダンツツジですが、実は四季を通して見所の多いのが魅力です。

春には、可愛らしい小さな釣鐘型の白い花を沢山咲かせ、秋にはとても鮮やかな真っ赤な色に紅葉します。冬の落葉期には、細い枝の先端に赤い芽をつけた姿が、まるでマツチ棒のようでまた面白いのです。

ドウダンツツジという名の「ドウダン」とは、「とうだい（灯台）」が転じたもので、枝分かれしている様子が昔用いられた照明器具である三本足の灯台（結び灯台）に似ていることからきています。

ドウダンツツジは、漢字で「灯台」と書く他に、「満天星」とも書きます。「満天星」と呼ばれる理由は、中国の故事が元になっています。その昔、道教の神である太上老君が仙宮で薬を練っていた時のこと、誤って傍の玉盤に入った霊水をこ



ぼしてしまいました。この水がドウダンツツジの木に降りかかり、水が枝に集まって壺状の玉になり、満天の星のように美しく輝いたことから「満天星」と呼ばれるようになったということです。

こんな素敵な伝説を知ってから見ると、いつでもよく見かける身近な木でも、なんだか秘密の生い立ちを教えてもらったような気がして、新たな一面を知れて特別な存在になったように思えるものですね。（文・絵／あらたに・なぎさ）



## 旅の止まり木・7

### ナイトフライト

谷口明子（陶芸家）

平成最後の秋、事情によりラトビアとリトアニアとエストニアとベラルーシを周遊したのだが、「バルト三国」とまとめて呼ばれる三つの国も、国ごとに風土が異なり（私はバルトの各国の国旗の色が、それぞれの国の印象ととてもシンクロしていると感じた）、また、同じ旧ソ連でもベラルーシはバルトとは全く異なる世界であった。一ヶ月弱うろろして、日本が恋しくはならなかったがアジアが恋しくはなかった。自分はアジア人だな、と改めて感じた。もちろんヨーロッパは美しいし、うらやましくて見習いたいような精神性もある。どちらが良い悪いということではなく、ただ、そう感じたのだ。

で、そんなことを思ったからであろうか、帰りの飛行機で一気にアジアに叩き込まれることができた。旅の予算が極めて限られていたこともあり、最安だった某中国系航空会社を使ったところ、乗客の九割五分が中国人であって、つまり機内は中国であった。私の隣はどうやら友人と席がばらけてしまったらしいおじさんで、しかも言葉の通じない私の隣になってしまって寂しく気まずそうだったが、ヘッドホンやスナックが配られてくると私の分も取ってくれたりした。

深夜のフライトだったのでさすがに元気な人たちも寝静まってくる。私は窓から外を凝視。広大な闇の中に、ぼつり。ぼつり。と、小さな明かりのかたまりがある。町だ。その小さな町と町との間には圧倒的

な暗い大地が横たわっている。その漆黒の中にほんやりと白っぽい地帯もあって、目を凝らすとそこは、不動の凶器のような山岳地帯。白く浮かび上がって見えたのはその峻厳な地形が冷たく雪をかぶっている姿だった。こうしてみると、地球上の陸地の中で、人間が暮らすことのできる部分というのはなんて限られているのだろう。そしてその限られたところに、町の明かりはなんて小さく寄り集まっていることだろう。たまに、町を構成するにも至っていない、ひとつふたつの明かりの連なりが弱く明滅しているところもあり、これは夜空の星にとても似ていた。あの明かりはどんな人が灯しているものだろう。眼下の明かりのかたまりはどの町の光だろう。座席のモニターのフライトマップで位置確認を試みるが、私は体内コンパスが破壊されている系のスーパード方向音痴のためうまく照合することができない。ひとつだけ、確信をもってあの明かりの群れはマップ上のこの町だ、とわかったのが、Ulaanorn（オランゴム）という、ロシアとの国境付近にあるモンゴルの町だった。飛行機を降りてすぐこの町の画像をスマホで検索した。寒そうで広い風景と、人や家畜などの画像が出てきた。この町の夜の暮らしの上を飛んだのだ。そう思うとなんともいえない感動をおぼえた。



ラトビアの市場

# 山の時間

中村政子

原おじいまいのこと

視界に入るものの中で動くものといえば、風に舞う木の葉、木から木へ枝から枝へ飛び移る小鳥、空の高みを悠然と旋回する鷹、流れる雲。これらが私の時計である。時がそんなふうの流れる村に、移り住んで三十年が経った。

信州南部の村、南アルプスの三〇〇〇メートル級の山を望む最奥の集落に私の家はある。南向きの斜面に家が点在する、気持ちのよい集落だ。三十年前は二十世帯あったのが、今では半分に減った。

住み始めた当時、集落の中には明治生まれのおじいまあまが六人いた。皆元気で畑を耕し、山の下草を刈り、針仕事も達者だった。最長老は、当時八十八歳だったと記憶する。初めて道で出会った日、この北澤のおじいまは自分の山から間伐した木材を、二本肩に担いで歩いてきた。向こうから赤ん坊を背負って歩いてくる新参者に、ニコニコと挨拶してくれた顔は今も忘れない。

二番目の長老は、集落の一番上に住んでいた。原のおじいまは筆まめな人で、集落のちょうど真中にあるポストまで、封筒や葉書を手に時折下ってきた。ポストまでの道の途中に我家はあり、時には土のついた野菜を携えて立ち寄ってくれた。

おじいまとの茶飲み話が、私は好きだった。天候のこと、作物のでき、かつての暮らしぶりに始まる昔話、そして興味深かったのは天文の話。おじいまの家の軒下には天体望遠鏡があった。おじいまは子供の時に父親の背中でハレー彗星を見たという。星の観察は、その後亡くなるまで彼の習慣となった。少年を魅了したハレー彗星は七十六年後の一九八六年に再び地球に接近した。生涯に二度ハレー彗星を見た人は、そんなに多くはないだろう。また、戦後まもなくのこと、南から北に向かってオレンジ色の大きな火の玉が、ゴーツという轟音とともに頭上を通り過ぎていった。おじいまは山に衝突するのではないかとびっくりしたそう。それが一九四七年にシベリアに落下した巨大な隕石だったことを、後日の新聞で知ったという。

おじいまが賢い人であることはわかってきた。隣の愛子さんから聞くとところによると、子供の頃から「神童」と噂されるほどだったらしい。若い頃の夢はブラジルに移民することだった、とおじいまは言った。四方を山に囲まれた狭い世界から、一度は飛び出そうとしたのだ。一旦、東京に出て叔父の家に寄宿している間に、父親が亡くなった。二十五歳の時だった。山の村に呼び戻され、それから一家の大黒柱となって働いてきたのだ。



一人暮らしをしていたおじいさまは、九十四歳で亡くなった。その年の冬は積雪が例年より多かった。春先に、雪の重みで傷んだ屋根を修理しようと庇に上った。そして、劣化していたビニールトタンを踏み抜いてしまったらしい。たまたま訪ねて行った人が声をかけても応えはなかったが、玄関前の嘔吐物と血痕と壊れた庇に異様を感じ家の中に入ってみると、おじいさまはバスタオルを頭に巻いて二階で横になっていた。

おじいさまが入院している間に二度見舞いに行った。おじいさまの脳の損傷は軽くなかった。感情を司る部位が傷ついてしまったようで、意識ははっきりしているが顔の表情が動くことはない。いつもの笑顔が消えてしまった。数カ月に及ぶ入院生活を送ったが、二度目に見舞った日、おじいさまは酸素吸入器を付け一人で横たわっていた。その状態を知らずに訪ねたのだが、苦しそうな呼吸のおじいさまに、手足をさすりながら声に出さずに語りかけた。よくがんばったね、もういいよ。

家に戻った私より早く、おじいさまの訃報は届いていた。おじいさまの魂を私は連れて帰ってきてしまったのかもしれない。

思えば、この人に支えてもらいながら、私の山暮らしは続けることができたのだ。行き詰まり、困り果て、へたりこんでいたその時に、この人の見せたまなざしが私を立たせてくれた。賢いだけでなく、これほど思いやりのある優しい人を私は知らない。おじいさまは亡くなって尚、私の道を照らす星になったのだと思っている。

# 授与品の紹介

飾り紐付き

破魔矢

紅白二本の江戸打ち紐と水引で破魔矢を飾りました。飾り結びは縁起の良い几帳結び・菊結び・叶結びです。ひとつひとつ心を込めて結いました。弥生神社オリジナルの破魔矢です。



千支の繭玉人形付き

ミニ熊手

弥生神社で手作りしました千支の繭玉人形付きのミニ熊手です。竹製の熊手に、松と梅、淡路結びの水引飾りをつけ、柄は麻で結びました。福をかき集めるという縁起物の熊手。今年の千支の亥を繭玉で作りました。亥のお顔、和紙の色柄は様々です。



社務猫ちよろ

あけましておめでとういっせいです。平らげへ安らげへ、世界中が平和でありますように。今年もよろしくお願ひします。(ホームページで社務猫のお話はじまりましたの。)



社務猫き一こ

ねこもしゃくしも(しゃくしてなんだ?) 幸せでありますように。美味しいスープがいっぱい飲めますように。

## 編集後記

十五冊めの「弥生」をお届けします。執筆者の皆さま、ご

協力いただいた皆さまに深く感謝いたします。新年号のテーマは星。様々な姿で私たち人類の心に刻まれる星の光と残像。そこには世界各地の文化や人々の思い、抱かれた世界観が映っていました★今夏、長野県にある高原で寝転び、満天の星空を凝視しながら静寂のなか、空に吸い込まれていく感覚を覚えました。畏れと自由を感じる強烈な体験でした。谷川俊太郎「二十億光年の孤独」の冒頭を思い出します。この詩の中の「星は我々人類がいる星でもあり、「人類は小さな球の上で、眠り起きそして働き、ときどき火星に仲間を欲しがったりする」。宇宙は「ゆがんでいる」「どんどん膨らんでいく」。それゆえ人は孤独と不安を抱き、万有引力のごとく求めあう。「通常感覚ではとらえようのない抽象的宇宙像が孤独や不安などの具体的な感覚と直結している」。それらは宇宙的な感覚と同時に社会的な感情であった、というのは十九歳の谷川氏の実感でした。我々の心の奥に巣くう恐れや歪み、揺れ、空虚さ、それらの源や在りかや、同時に宇宙の片隅にいる我々という存在そのものの在り方を感覚で探るうち、途方もない宇宙の広大さと可能性ゆえにか、恐れとともに自由に解放されていくような気がしてきます。そして人を求めつながら合う自然さを感じました★たとえは星の連なりである銀河、天の川は世界中で様々に捉えられていました。「大蛇」「羊飼の小屋の川」「偉人の魂が神の国へ行く道」「有魂亡霊の群がる道」「死んだ友たちがダチヨウを追いつ追いつている道」「魂が美しい鳥となって骸の口を出て天国へ飛んでいく鳥の道」「日の神が年ごとに北を旅をし、また南へ帰る道」「空の底を泳いでいるウミガメが掻き濁している泥水」。それらイメージのもつ多様性と豊かさ。同時に、空を見上げて亡き人の魂の行方を案じ、再会を切実に願う人々の思いに深く共感します★昨年、弥生神社の宗教・文化講座では「生と死をめぐって」をテーマに多様な死生観・世界観にスポットを当て、考え合いました。今後もゆっくりと進んで参ります。心穏やかな年になりますように。本年もよろしくお願ひいたします。(権禰宜 池田 奈)

印刷 文明堂印刷

編集発行 弥生神社 神奈川県海老名市国分北 二一三十一三三